



## 近畿における近代酒造業の変遷：灘五郷を中心に

塩見, 侑吾

---

(Citation)

兵庫地理, 53:33-42

(Issue Date)

2008-03-31

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002463>



# 近畿における近代酒造業の変遷

## —灘五郷を中心に—

塩見 侑吾

### 1. はじめに

酒造業は、我が国において早くから発達した産業の一つである。江戸幕府による経済システムが崩壊し、明治維新以後は幕府の既存制度の撤廃、新政府による新たな経済政策の推進で、各分野で経済の自由化が進んだ。酒造業においても、酒株制度が廃止され、江戸等を市場としてきた大都市酒造資本と、自家用酒の製造から発展してきた地方酒造資本との自由競争の時代に入った。このため、江戸時代からの伝統的酒造地も変革を余儀なくされ、新たな流通システムの構築や、酒造家の法人化といった改革が進み、近代産業としての酒造業が始まるのである。

江戸期の畿内においては、灘五郷が江戸積酒造地として発展していた。しかし、灘でさえ競争が激しく、明治時代中期には、醸造から撤退した酒造家の蔵を、他地域で醸造していた酒造家が購入して、灘で酒造りを試みる例も珍しくなかった。一方、灘以外の近畿の酒造地に目を向けると、明治時代以降、灘へ進出した酒造地でも、順調に発展した酒造地と、衰退した酒造地に二分されるのである。前者の代表例が伏見であり、後者の代表例としては京都や大坂三郷、堺が挙げられる。

これまで灘五郷や近隣酒造地を扱った研

究については、主に経済史分野や文献史学分野で多数の業績が蓄積されている。その中で近代期の灘五郷に着目したものとしては、上村が灘酒造業が近世から近代にかけての灘五郷の展開を追う事で、明治以降における灘五郷の発展は、巨大酒造家の出現と販売機構の改善が原動力になったと論じている<sup>1)</sup>。また、大島は明治時代における清酒流通の構造変化について論じ、問屋主導からメーカー主導の取引への変化は、東京市場ではなく地方で先に現れたことと、メーカー優位の関係により産地間競争における灘五郷の優位性を示している<sup>2)</sup>。

次に、灘五郷と各酒造地の繋がり、伏見に関しては、上村が伏見酒造業の灘五郷への進出に関して、月桂冠の事例を用いて市場獲得のために灘五郷の模倣が必要であったことや、規模の拡大を推し進めた後は、灘支店での酒造りが伏見の分工場化したことを明らかにした<sup>3)</sup>。堺に関しては、加藤は明治時代における地域を超えた外来酒造家の灘進出の要因として、灘の立地の優位性や、灘五郷進出により出身地の酒造地の衰退をもたらす場合があることを堺の事例を用いて分析している<sup>4)</sup>。また、加藤は堺酒造業衰退の理由として、生産構造を灘五郷に依存していたこと、また地域的協力がなかったため、競争力が低下していたこと

に言及している<sup>9)</sup>。しかし、従来の研究では、伏見や灘五郷といった地域毎の分析が中心であり、各酒造地の比較研究は看過されてきた。そこで、単一の酒造地に囚われることなく、近隣酒造地の動向を広範に検討する事で、近世から近代への過渡期に、何が酒造業の盛衰に結びついたのかを、より深く洞察することができると考える。

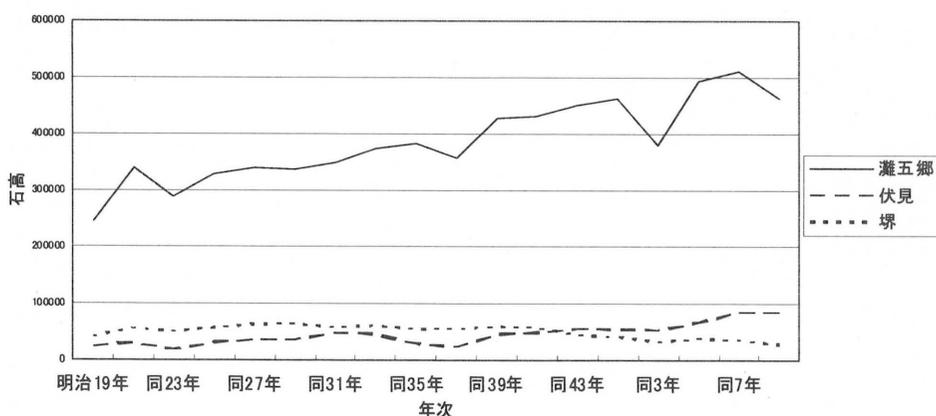
ゆえに、本稿では近代の近畿における酒造業の生産構造の違いについて、灘五郷を中心的な研究対象地として明らかにすることを目的とする。また、比較地域として、灘五郷からの距離や資料の残存状況に鑑み、伏見と堺の酒造地を取り上げる。両酒造地は、灘へ進出した時期が同じであるが、その後の成長は対照的であり、伏見は灘進出後も造石高が順調に増加したのに比べ、堺の場合は減少傾向を示した(第1図)。この違いの要因を、生産構造の違いから探ることで、酒造地の盛衰の一因を見出せると考える。

以下本稿の展開として、II章では地域概観として、灘五郷を中心に、伏見、堺の成立について略述する。III章では、酒造りの生産構造から見た各酒造地の特性を比較する。酒質を決める3要素として、米、水、杜氏があるが、これらは、調達および出身地域によりその特性に大きな差がある。そこで、各酒造地のこれら3要素の調達先から、各酒造地における生産構造の共通点と相違点を検出する。

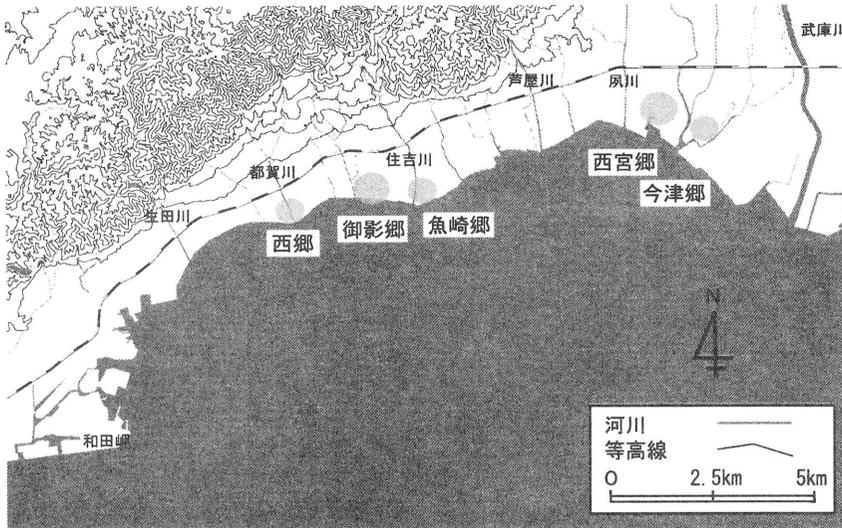
## 2. 地域概観

### 1) 灘五郷の概況

現在の灘五郷は、西宮市今津地区から神戸市灘区大石地区に至る、大阪湾沿岸の東西12kmの地域であり、五郷と称するように5地区で構成している(第2図)。それぞれ、東から西宮市に属する今津郷、西宮郷、神戸市に属する魚崎郷、御影郷、西郷である。現在のように五郷と称すようになったのは明治中期以降のことである。かつての



第1図 灘五郷・伏見・堺の造石高の比較



第2図 灘における五郷の配置

灘の酒造地域は、より広範囲に亘っており、灘目三郷と称した江戸時代前期に最も広範囲に展開していた。灘目三郷は、今津郷、上郷、下郷で形成され、東端の武庫川から西端の和田岬に至るまでを含んでいたため、現在の約2倍の広がりであった。

灘五郷の地形は、六甲山から流れる住吉川、石屋川、夙川等が形成する扇状地の末端にあたり、酒造りに必要な水の確保の点では有利であった。その反面、地盤が軟弱という欠点もあり、これが阪神大震災時における酒蔵の崩壊等、建物被害拡大を招くことになった。

平成17(2005)年における業者数は36、酒蔵数は22となっており<sup>6)</sup>、酒蔵を所持していない業者が存在することが分かる。これは、最近の日本酒需要が低下している煽りを受けたもので、元々酒蔵だったところを駐車場などにして、屋号だけ維持している休造中の業者が存在している。また、阪神

大震災以後は業者の再編や伏見の一部酒造家が灘から撤退するなど、灘を取り巻く状況も変化している。このように、平成18(2006)年において全国の市場占拠率で27%<sup>7)</sup>を占める灘といえども、経営状況は必ずしも良好とはいえない。

## 2) 幕末までの灘の酒造状況

次に、明治時代前期までの灘五郷の歴史を概観しよう。灘では伝承によると、室町時代には酒造りが始まったと言われている。江戸時代には、幕府は積極的に酒造りを奨励し、享保期には灘五郷でも盛んに酒が造られるようになった。灘五郷が成長した一要因として、地理的優位性が挙げられる。従来は伊丹、池田、大坂三郷といった大坂周辺の酒造地が優位であったが、灘五郷の後背地である六甲山から流れ下る圧倒的な河川の水量を背景に、従来型の足踏み精米から、最盛期には277場に上る水車精米を

稼働させ、以前に比べて高効率の精米を実現した。これに比べ、大坂の酒造地は、市街地に酒造工場があったため、土地が狭く拡張性がなく、水車精米を行うための土地にも恵まれなかったため、旧来の足踏み精米を行わざるを得なかった<sup>9)</sup>。

この結果、天明5(1754)年には江戸入津高のうち、灘五郷が約47%を占めるまでに比率が増大し、全国有数の酒造地として知られることになる<sup>9)</sup>。これ以後、江戸幕府は、米の豊凶により、酒株統制等の統制策と、勝手造り等の奨励策を繰り返し、灘五郷の江戸入津高に占める割合も上下したが、結局的には、江戸積酒造地を主体として形成された摂泉十二郷の中でも、灘の占める割合が次第に増した。江戸末期になると、灘五郷は革新的な施策を行い、産業における効率性を追求した。具体的には、船舶の購入や、船会社への出資を行い、輸送手段を自前で確保した。この他、江戸における問屋の系列化、酒造家同士の合併による資本の集中、大規模化を進めて、競争力を高めていった<sup>10)</sup>。この結果、江戸時代末期には現在の灘五郷の中で、灘目と呼ばれた御影郷や魚崎郷や西郷を中心に著しい成長を見せ、灘五郷の畿内における地位は揺るぎのないものになってゆく(第3表、番号3)。

### 3) 伏見の酒造

伏見は京都市の南部、桃山丘陵の西側に位置し、南側に宇治川が流れ、淀川の船運で大坂、兵庫と結ばれていた。そして、豊臣秀吉の伏見城築城により、市街地が形成され、政治、経済の中心となり、また交通の要衝であった<sup>11)</sup>。

酒造に関しても、明暦3(1657)年には伏見

は酒造業者数83、造石高が15,616石という国内有数の酒造地として君臨していた。しかし、その後は江戸時代を通じ、幕府による京都市中の主要産業保護政策のため、洛外酒として京都市場への搬入を禁止された。逆に伏見は近江などの他所酒侵入に苦しんでいた。このため、当時の伏見の生産高は近隣の京都に比べて低下し、伏見での宿場の酒、町方の酒として地売を中心として残存していた。その後、江戸時代末期には、鳥羽伏見の戦いで壊滅的な打撃を受け、存亡の危機に瀕した。

当時の近畿の酒造地における伏見(第1表、番号1)の位置を見ると、酒造株高の減少が進み、享保3(1803)年の7,319石から天保3(1832)年には2,197石と、他の酒造地に比べても尼崎(第1表、番号9)と並び衰退傾向にあった。このような状況を乗り切るため、酒屋仲間が団結して外圧に抵抗して、仲間組織の堅持、江戸積みの継続、買酒地域の拡大、洛中市場への事実上の進出といった経験が、伏見の業者に現状把握能力や、品質向上への強い志向、市場や輸送に関する広い視野を培ったとされる<sup>12)</sup>。

### 4) 堺の酒造

堺は、阪堺線西部の旧市街地の限られた場所で、東部洪積台地からの伏流水を活かした酒造りを行っていた。堺における酒造の江戸時代の動向は資料に乏しいが、摂泉十二郷の一つに堺も位置していた。摂泉十二郷内における堺(第1表、番号12)の位置は、灘(第1表、番号3)、大阪三郷(第1表、番号11)、伊丹(第1表、番号5)、西宮(第1表、番号4)に次ぐ規模となっており、早くから発展した酒造地であることがわかる。

第1表 各酒造地の酒屋軒数と酒造株高

番号	酒造地	享和3年(1803)		天保3年(1832)	
		酒造株高	軒数	酒造株高	軒数
1	伏見	7,319	28	2,197	27
2	今津	25,327	27	45,783	28
3	灘	226,285	188	416,336	229
4	西宮	63,900	43	54,200	43
5	伊丹	68,906	68	106,758	85
6	池田	23,201	22	28,305	25
7	北在	19,961	32	20,362	30
8	兵庫	19,375	32	19,375	27
9	尼崎	12,468	16	4,767	9
10	伝法	8,496	6	12,904	12
11	大阪三郷	172,795(不明)		142,948 (不明)	
12	堺	35,228	68	41,992	79
	合計	683,261	530	895,927	594

(柚木学『日本の技術 3』第一法規,1988,83 頁および伏見酒造組合一二五年史編纂委員会『伏見酒造組合一二五年史』伏見酒造組合,2001,32 頁,表 1-5 より作成)

注 1)伏見については、文化元年(1804)、天保4年(1833)の統計を利用

また、その造石高に比べ、酒造家の数が多かったことから、中小酒造家による酒造高が多かったと推測できる。堺の酒質の特徴として、概ね醇烈であり、その質の耐久性が高かったと言われる。このため、長時間の輸送でも酒質が劣化し難いのが特徴で、摂泉十二郷の一員ではあったが、古くより江戸積よりも長門、周防及び九州諸国への販売を中心としていた<sup>13)</sup>。江戸積酒量の推移を見ると、江戸末期には灘や西宮が摂泉十二郷内での江戸積割合を高めているのに比べ、堺は江戸積割合が十二郷の中でも大きく減少している<sup>14)</sup>。このように、堺は早くから地方市場を開拓しており、畿内の酒

造地の中では江戸積主体の販売体系からの脱却を図っていたといえる。

### 3. 生産構造から見た近代の3酒造地

本章では、灘、伏見、堺における原材料の調達方法と製造方法の特徴について述べることにしたい。酒の原材料には米、水が主要な位置を占めている。3酒造地における米と水の入手方法について明らかにすることで、各地の酒造に関する戦略的特徴が明確になる。まず、1)では、各地における米の購入方法を、2)では、水の入手方法について明示したい。米と水は酒造において欠かせない要素であるため、個々の酒造業者の工夫が垣間見られよう。3)では、製造の担い手としての杜氏を取り上げる。杜氏は畿内各地から酒造地へ来訪しており、酒造地と杜氏の出身地から地域的な連繋が浮かび上がると考える。

#### 1) 米

##### a) 灘

江戸時代には摂津、播磨の他に、備前、出羽、豊後、越後など、購入先は全国に亘っていた。しかし、江戸時代後期になると、80~90%が摂津、播磨に絞られた<sup>15)</sup>。明治時代の灘五郷における原料米は、概ね配米として、摂津・三島郡、武庫郡と播磨・加東郡、美囊郡の米を用いて、掛米として摂津・有馬郡、播磨・加西郡、明石郡、加古郡の米を使用した<sup>16)</sup>。灘は明治24(1891)年に村米制度を作った。これは、酒造米の取引にあたって、酒造家が特定の酒米産地の村全体をまとめて、良質米を購入する一種の栽培契約であった。これにより、酒造家は固定した調達先を持ち、村全体での米質

改良を怠ると、取引を打ち切ることができた。このため、灘は良質米を安定調達することが可能であった<sup>17)</sup>。

#### b) 伏見

続いて伏見について、月桂冠を事例に見よう。月桂冠は明治 38(1905)年に摂津、山城、近州、河内から酒米を調達していた。その後、購入地域は、丹波・南桑田郡、船井郡、多紀郡、備前・赤磐郡に拡大している。灘や堺との違いとして、山城や近州といった近畿北東部からの調達があった<sup>18)</sup>。摂津の米に関しては、灘の酒造家が村米制度で一村全部の米を買約するため、そこから漏れた米を使用せねばならなかったと言われる<sup>19)</sup>。

#### c) 堺

堺酒造家の原料米の調達は、量については不明であるが、明治 36(1903)年における堺酒造家の原料米の調達状況を見ると、河内、和泉といった地名が見られることから、堺から比較的近い地域から調達していたことが分かる。また、各酒造家に共通して見られる特色として、播磨、摂津からの調達がある<sup>20)</sup>。しかし、この時点で灘における村米制度が始まっているため、伏見と同じように、灘の村米制度に加入していない村落から米を確保していたと考えられる。

### 2) 水

#### a) 灘

灘五郷は後背地に六甲山系があり、山から流れた水は、花崗岩質の土壌を経ている。また海も近く、塩分が混じり独特の水質を生み出していた。江戸時代中期には、中郷では御影村の東北にあった井戸の水を用い

て、今津郷は御手洗川の水を用いたように、各郷でそれぞれに採水していた。

だが、宮水の発見によりこの状況が一変する。天保 11(1840)年に、魚崎村の山邑太左衛門が、西宮の井戸で醸造に適した特殊な水を発見し、初めて酒造に用いた。後に「宮水」と呼ばれたこの水を、灘五郷の酒造家は競って利用し、水源から離れた御影郷、魚崎郷、西郷でも陸上や海上輸送で自らの蔵で使用した<sup>21)</sup>。明治 34(1901)年頃には海へ向けて土管が敷設され、水詰め場が設定されて酒造用水の海上輸送用設備が整えられ、各地に水を輸出した<sup>22)</sup>。

#### b) 伏見

伏見は昔「伏水」と呼ばれた地域であり、宇治川、鴨川、桂川の合流点近くに位置していることから、元々水は豊富な土地柄であった。桃山丘陵から豊富な伏流水が市街地に向け流下しており、名水と称される井戸が点在し、そこから豊富に水が湧き出していた<sup>23)</sup>。この地下水は中硬水であり、ミネラルの含量が適度であったため、持続力があり、キメの細かい芳醇な酒を造るのに適していた。

月桂冠は明治 31(1898)年に灘支店で使用していた宮水を、初めて伏見に輸送して仕込んだ。その後も両地の水を比較したが、水輸送に障害が多かったため、伏見では灘は用いられず、伏見の水が用いられた<sup>24)</sup>。

#### c) 堺

堺では明治以降、近代工業が勃興すると、地下水の汲み上げ量が多くなり、旧市街地の水源は汚染、枯渇が目立つようになった。このため、堺では酒蔵に適した水を多量に

確保することが必要となった。そこで明治時代前期に、一部の有志が西宮郷から宮水を共同で購入した。当初は酒造改良の目的で購入したが、年々それを用いる酒造家が増加した<sup>25)</sup>。さらに、西宮の水を専用水とする業者も複数存在した。具体的には、明治39(1906)年に酒造用水として約134万石(7,442石)の水を西宮から輸入して海上輸送で運んでいた<sup>26)</sup>。当時の状況をみると、西宮からの宮水運搬船79隻のうち、堺行きは8隻の比率であった。このような船舶による輸送を毎日行って、堺は常に新鮮な水を確保することが出来た。さらに、万一に備えて2日間使用できる備蓄水の確保がなされていた。これは、海上が時化することで、毎年3隻程が転覆していたように、海上輸送による弊害を見越してのことであった。こうした状況では輸送費がかかるため、経済的にも水を自らの土地で確保できないのは不利であった<sup>27)</sup>。

### 3) 杜氏

#### a) 灘

灘は生瀬杜氏(現：兵庫県宝塚市生瀬地区付近)を雇用していた。これは、近世における灘での酒造に際して、生瀬杜氏が多くを占めていた伊丹や池田の酒に倣って醸造したという起源に由来する。その後、播州杜氏(現：兵庫県姫路市周辺)が主流となった時代を経て、丹波杜氏(現：兵庫県篠山市周辺)が主流となった。播州杜氏と丹波杜氏の関係は、播州杜氏が丹波杜氏の師匠筋であったと言われている。丹波杜氏の酒造りの特徴として、海岸沿いの温暖な地から、寒冷的な気候であった内陸部へと転換した結果、丹波流と言われる芯の強い男酒を作り出し

た。これは硬水地方での醸造に適した方法であり、灘五郷の醸造環境には好適であった<sup>28)</sup>。

このため、灘五郷においては丹波杜氏(第2表,番号1-3)が明治時代に約80%を占める大勢力になった。大正時代も引き続いて、丹波杜氏が約90%を占めており、灘においては丹波杜氏がその酒質を作り出していたと考えて間違いないだろう。

第2表 大正7年(1918)の灘五郷における杜氏、頭、代司の出身地別人数と構成比

番号	出身地域	杜氏	頭	代司	合計	比率(%)
1	丹波多紀郡	335	273	311	919	73.3%
2	丹波水上郡	31	64	48	143	11.4%
3	丹波天田郡	13	25	16	54	4.3%
4	但馬朝来郡	12	42	27	81	6.5%
5	摂津有馬郡	17	14	14	45	3.6%
6	播州揖保郡	8	2	2	12	1.0%
	合計	416	420	418	1254	100.0%

(西宮税務署編『灘五郷酒造一班』西宮税務署,1919,25-26頁より作成)

#### b) 伏見

伏見に関しては、灘とは異なった様相を示す。伏見で活動していた杜氏は、当地に近接した丹後杜氏(現：京都府与謝郡周辺)と糠杜氏(現：福井県南越前町)が目立っており、丹後杜氏の約半数が伏見へ、また糠杜氏も約43%が伏見へ出稼ぎへと行っていた<sup>29)</sup>。

伏見では江戸時代までは「丹後宿」と呼ばれる杜氏の斡旋制度があった。この「丹後宿」の制度があった時期は、名前の通り丹後杜氏の割合が多かったが、慶応3(1867)年に制度が無くなると、糠杜氏の台頭が目立った。月桂冠では、明治20年代に自蔵におい

て、糠杜氏の坂崎太郎次郎を採用した事例がある<sup>30)</sup>。

また、大正5(1916)年の伏見における蔵人の構成は、938人の内、福井県(第3表,番号1-5)が510人で割合にして約54%という圧倒的な数を占めている。それに続くのが京都府(第3表,番号10-13)の169人、兵庫県(第3表,番号6-9)の131人の順であった。当時伏見の蔵人の約5人に1人が糠出身者を占

第3表 大正5年(1916)の伏見における蔵人の出身地構成

番号	出身地	人数	比率(%)
1	福井県南篠郡	230	24.5%
2	福井県丹生郡	77	8.2%
3	福井県大野郡	194	20.7%
4	福井県今立郡	8	0.9%
5	福井県他	1	0.1%
6	兵庫県多紀郡	53	5.7%
7	兵庫県水上郡	12	1.3%
8	兵庫県城崎郡	61	6.5%
9	兵庫県他	5	0.5%
10	京都府竹野郡	142	15.1%
11	京都府船井郡	9	1.0%
12	京都府天田郡	14	1.5%
13	京都府他	4	0.4%
14	石川県珠州郡	75	8.0%
15	石川県他	1	0.1%
16	滋賀県甲賀郡	2	0.2%
17	滋賀県他	1	0.1%
18	愛媛県北宇和郡	23	2.5%
19	愛媛県南宇和郡	3	0.3%
20	愛媛県他	0	0.0%
21	不明	23	2.5%
	合計	938	100.0%

(石川健次郎「伏見酒造業における蔵人の出身地分布—大正5年の場合—」同志社商学40号5,1989,341頁,表2より作成)

めていた<sup>31)</sup>。杜氏が蔵の最高責任者という側面から、蔵人の構成比は杜氏の出身地および構成比と一致すると考える。大正5(1916)年の蔵人構成比と、明治20年代に月桂冠が糟杜氏を採用していたことから鑑みて、明治中期に伏見では糟杜氏がかなりの割合を占めていたと推測できる。

#### c) 堺

堺においては、播州杜氏(第4表,番号1,4-6)が約60%を占め最大勢力であり、丹波杜氏(第4表,番号2,7)が約23%でそれに続いている。つまり、かつて灘が主要な出稼ぎ先であった播州杜氏が、明治時代になると堺にその出稼ぎ先を移したのである。

灘五郷を超えて播州杜氏が灘で就労していた要因として、灘五郷において播州杜氏や地杜氏の賃金が高騰したため、丹波杜氏に入れ替わったという背景がある。寛政期以降に、灘周辺の杜氏が他国へ出稼ぎを行っていた。灘五郷が名声を獲得するにつれて高く評価され、他国の酒屋で優遇された<sup>32)</sup>。特に、播州杜氏は足踏み精米技術が高度だったことが挙げられる<sup>33)</sup>。灘五郷は早い時期から水車精米を行っていたため、精米のための労働力需要は少なかった。このことから、播州杜氏は人力精米を用いていた堺へと、その活動拠点を移したと考えられよう。

#### 4. おわりに

以上のように、三酒造地の生産構造について述べてきた。原材料である米の獲得については、知名度が高く、また購買力がある灘が摂津米等の酒造に好適な米を抑え

第4表 明治31年(1898)の堺における杜氏の  
出身地構成

番号	出身地	人数	比率(%)
1	兵庫県揖保郡	32	52.5%
2	兵庫県多紀郡	13	21.3%
3	兵庫県津名郡	2	3.3%
4	兵庫県飾磨郡	2	3.3%
5	兵庫県揖東郡	1	1.6%
6	兵庫県揖西郡	1	1.6%
7	兵庫県有馬郡	1	1.6%
8	京都府与謝郡	2	3.3%
9	大阪府堺市	7	11.5%
	合計	61	100.0%

(堺酒造組合事務所編『酒造月報第90号』堺酒造組合事務所,1898,6-11頁より作成)

ていた。このため、伏見と堺は最高質の米を十分に確保することは難しく、必要量を満たすために、他地域産の米を入手する必要があった。次に水については、伏見は自前の水の確保が可能だったのに比べ、堺は市街地化が著しかったため、良質な水を自前で確保ができないため、船による遠距離輸送というリスクを背負いながらも、灘と同じ水に移入して使用した。続いて杜氏は、灘の丹波杜氏、伏見の糠杜氏、堺の播州杜氏が、各酒造地の代表的な杜氏として、腕を振るっていた。このように、各酒造地がそれぞれに自前の杜氏を確保していた。しかし、灘と堺は丹波杜氏の発祥の経緯から技術が似ており、その醸造技術には類似点があると考えられる。

これらの3要素から見ると、近畿における3酒造地の生産構造の特性として、灘と堺の酒質には類似点が3要素ともにあるが、

伏見は堺に比べ、入手先に灘との違いが目立つことが挙げられる。つまり、酒造りにおける各酒造地の独自性は、伏見が堺に比べて高いといえる。これを堺と伏見の盛衰に当てはめて考えると、堺酒造地の衰退要因として、明治末期に堺の有力酒造家がこぞって灘へ移転したことが挙げられる。これは、生産面から考えると、堺の酒造家が生産地域に拘る必要性がなかったとも言える。一方で、明治末期に伏見からの灘進出が月桂冠のみに留まった要因として、伏見酒は地元伏見でしか造れなかったからと考えられる。

今後の課題として、主に販売面から見た3酒造地の関係について考察する必要がある。これにより、伏見と堺の盛衰の相違について、大酒造地であった灘との販売地域との差異や、内陸に位置していた伏見と臨海の堺という立地の違いによる販売地域の相違が明らかにできよう。これにより、生産構造だけでなく、流通の視点から近畿の3酒造地の関係を解明することが可能となる。

#### 注

- 1) 上村雅洋(1989):灘酒造業の展開, 社会経済史学 55-2, 12-31頁。
- 2) 大島朋剛(2007):明治期における清酒流通の構造変化とその担い手, 歴史と経済 194, 1-17頁。
- 3) 上村雅洋(1998):伏見酒造業と灘酒造業-大倉家の灘支店機能の変化を中心に-, 経済学論及 52-2, 141-71頁。
- 4) 加藤慶一郎(1993):明治後期・大正期の酒造業における産地構造の変化-灘五郷における外来種増家を中心として-, 六甲台論集 39-4, 53-61頁。
- 5) 加藤慶一郎(1993):酒造業における産地構造の変化-明治・大正期の堺酒造業をめぐって-, 六甲台論集 40-1, 63-77頁。

- 6) 灘五郷酒造組合より頂いた資料による。
- 7) この割合算出には西宮市工業統計を利用した。  
URL:<http://www.nishi.or.jp/homepage/siry o/toukei/h16kogyou.pdf> (2007年1月15日検索)
- 8) 前掲1)16頁。
- 9) 前掲1)14頁。
- 10) 前掲1)22-25頁。
- 11) 伏見酒造組合一二五年史編纂委員会(2001):『伏見酒造組合一二五年史』伏見酒造組合, 2-3頁。
- 12) 前掲11)10-11頁。
- 13) 菅谷秋水編(1910):『灘酒史』大谷商店, 58-59頁。
- 14) 神戸税務監督局編(1908):『続灘酒沿革誌』神戸税務監督局, 180-183頁。
- 15) 西宮酒造株式会社社史編纂室編(1989):『西宮酒造100年史』西宮酒造株式会社, 19頁。
- 16) 西宮税務署編(1919):『灘五郷酒造一斑』西宮税務署, 12頁。
- 17) 蔭山公雄編(1979):『灘の酒用語集』灘酒研究会, 303-305頁。
- 18) 月桂冠株式会社社史編纂委員会編(1999):『月桂冠三百六十年史』月桂冠株式会社, 148-149頁。
- 19) 前掲17)97頁。
- 20) 小葉田淳編(1974):『堺市史 続編第5巻』堺市, 734-743頁。
- 21) 神戸税務監督局編(1908):『灘酒沿革誌』神戸税務監督局, 312-313頁。
- 22) 前掲15)20-22頁。
- 23) 前掲11)2頁。
- 24) 前掲17)148頁。
- 25) 堺酒造組合事務所編(1895):『酒造月報第52号』堺酒造組合事務所, 5頁。
- 26) 内務省土木局編(1906):『大日本帝国港湾統計』雄松堂出版, 64-65頁。
- 27) 神戸税務監督局編(1908):『続灘酒沿革誌』神戸税務監督局, 108-109頁。
- 28) 篠田純(1957):『西日本の酒造杜氏集団』京都大学人文科学研究所調査報告第15号, 21-22頁。
- 29) 前掲28)42-43頁。
- 30) 前掲17)140頁。
- 31) 石川健次郎(1989):『伏見酒造業における蔵人の出身地分布—大正5年の場合—』同志社商学40号5, 340-343頁。
- 32) 柚木学(1965):『近世灘酒経済史』ミネルヴァ書房, 147-149頁。
- 33) 前掲27)20頁。

(しおみ ゆうご・神戸大学大学院生)